

## 女性のアイデンティティと社会関係 ——都市集合住宅における家族と近隣——

1. 問題の所在
2. 分析の視角
3. 分析の方法
4. 主要な分析結果
5. 結語にかえて

野 沢 慎 司\*  
小 林 良 二\*\*

### 要 約

近年、家族内の役割に限定されずに自己のアイデンティティ実現を家族外の活動に求める女性が次第に増加している。アイデンティティの実現の過程に、社会関係、殊に家族関係と近隣地区での友人関係の形成状態がどのような関連を持つのかを検討する。東京都内にある比較的新しい集合住宅団地の主婦を対象にした調査データを使用して、夫婦関係と近隣（友人）関係の布置状況が、主婦の家族外活動のパターンと一定の相互規定関係にあることを示す。

### 1. 問題の所在——家族の内と外——

1950年代の終わり、東京の郊外でサラリーマンとその家族の調査研究を行ったボーゲル（E. F. Vogel）は、彼の調査対象地となったM町の住民の集団所属について次のように要約していた。

「M町ではだれもが滅多に忠誠心を分割したことはない。分割すれば個人の行動を統制することはむずかしくなるのである。なぜなら、彼は本来的に身を捧げる対象である家族以外には、一般に唯一の集団にしか所属していないからである。つまり、夫の場合には職場集団であり、妻の場合には近隣集団であり、子供の場合には学校集団である。（中略）すべての人がそれぞれの家族に縛りつけられているのであるが、家族の要求と、他の集団の要求とは注意深く区別されている。家族と

夫の職場との接触を巧みに分離することは、仕事のことを考えることと家族のことを考えることが隔絶されていることを保証するものである。同じように妻がとりむすんでいる近所づきあいから夫を遠ざけることは、夫が彼女の集団に干渉することがないことを保証するのである。どの集団も事実上完全な自治をもっている。そして家族の忠誠心と他の集団への忠誠心とが葛藤するような機会はある限り少なくされている。」<sup>1)</sup>

ボーゲルが観た郊外サラリーマン家族の社会関係は、「夫・妻・子供の隔絶された世界」であった。そして、こうした壁で仕切られた社会関係は同時に夫婦間のはっきりとした分業と重なり合っているとされ、主婦である妻たちは「主婦としての役割のなかでの自己実現に、より大きい満足感を期待できるのである」と結論付けられてい

\* 静岡大学人文学部

\*\* 東京都立大学都市研究センター

る。<sup>2)</sup>

このような家族像は、アメリカ社会を暗黙の比較の基準にしているという限定付きで見れば現在でも一定の妥当性を有しているといえるが、当時と現在を比較すればかなり明確な変化がみられる。最も重要な変化は、女性の社会参加の増大であろう。それはまず第一には、職場への女性の進出であり、それにとともなう「夫は仕事、妻は家庭」という役割分業を当然とする規範の変化である。特に女性において意識の変化は際立っている。結婚して子供が生まれてもできるだけ職業を持続けたほうがよいとする女性は、1973年から1983年の10年間に限っても10%の増加を示し、34%に上っているという報告もある。<sup>3)</sup>第二には、地域社会でボランティアな文化・社会グループが多く形成され、女性たちに重要な活動の場を与えつつあるという指摘も目立っている。<sup>4)</sup>こうした一連の変化は、女性のアイデンティティのあり方が多様化し、女性たちが必ずしも「主婦としての役割」に満足しなくなったこと、すなわち活動の選択肢が広がってきたことを意味している。

こうした社会状況の変化が家族関係、友人関係などの社会関係のありようをも変化させていることを前提としたうえで、多面的な個人のアイデンティティの実現（諸活動）は、その個人が形成している社会関係の内容にどのように規定されるのかを探るのが本稿の目的である。果たして、現代都市に居住する妻たちにとって、家族の内部と外部は完全に分離した世界なのだろうか。家族外での活動の増加は同時に家族内外の社会関係のバランスの変化をもたらすことになるのではないだろうか。都市集合住宅に居住する主婦を対象とした調査データを使用して、家族内外のアイデンティティと社会関係の相互浸透の実態の一端を明らかにしたい。

## 2. 分析のための視角——アイデンティティと社会関係——

現代の女性の生き方が多様になり、家庭内の役割にのみ満足しなくなったことは、例えば結婚し

ない、子供をつくらないという選択肢をとる女性が増えたということには必ずしもならない。むしろ実際には結婚、出産、仕事のすべてを実現しようとする女性が増加し、複数の役割を実現するための短期的・長期的な活動配分の多様性が見られるようになったことを意味している。<sup>5)</sup>女性に限らず、個人の生活は多くの場合複数の活動場面にまたがっていると想定できるが、それはすなわち個人が相互に結び付いたり、葛藤したりしうやうないいくつかの役割を担っていることでもある。従って個人のアイデンティティは、こうした複数の役割に結び付いた複数の自己イメージによって構成されていると考えられる。これらの個々の役割を実行する際の理想化された自己イメージを、マッコールとシモンズ（McCall & Simmons, 1978）は役割アイデンティティ（role-identity）と呼び、個人の複数の役割アイデンティティはそれぞれその個人自身によって「柔らかい顕著性のヒエラルキー」としてゆるやかにパターン化されていると言う。<sup>6)</sup>つまり、個々の役割アイデンティティはその重要度において差のあるものとして個人の中で位置付けられているということになる。

こうしたアイデンティティの理論モデルに立脚しつつ女性の問題に戻れば、現代女性の日常生活は、家族の内外に関わる複数の役割アイデンティティを自己の価値体系の中に位置付け、より高く位置付けられた役割アイデンティティを具体的な場面で活動に結び付けようとする過程と読み換えることができよう。典型的には、母親、妻、職業人、地域集団等の参加者などが、相互に競合しうる主要な役割であろう。

役割アイデンティティの実現という観点から個人の諸活動の配分状態を見れば、その規定要因はまず第一に個人の個々の役割アイデンティティの相対的位置付けであることになるが、この内的な要因に対して、利用可能な時間や諸資源という外的な要因がもう一方に想定される。本稿では、この外的要因のうち、家族内外の社会関係の状態を取り上げて、アイデンティティの実現状態との間にどのような相互規定関係がみられるかを探るこ

とにする。<sup>7)</sup>ここでは、特に夫婦関係と近隣地域内に存在する友人関係に焦点を合わせることになる。すなわちどのような役割アイデンティティを実際の活動に結び付けるかということが、社会関係の配置や内容と一定の相互規定関係にあるという想定に立っている。これは、ヘンリー (J. Henry: 1958) が提唱し、「個人が、支援や承認を与えてくれることをあてにすることができる一群の人々」と定義した「パーソナル・コミュニティ (personal community)」の概念に該当する社会関係のうち、何が個々の役割アイデンティティの実現に影響を持ち、何が実際の活動によって変化させられるのかを問うことであるといえる。

筆者は、かつて夫婦の集団参加のタイプと関心の類似の度合いによって、夫婦関係を「一致型」と「不一致型」とに分け、一致型において妻のアイデンティティの実現に夫が関与する程度が高いことを、東京都内の民間の集合住宅団地の調査データを使用して示した (野沢, 1986)。その際、夫は妻の特定の役割アイデンティティの実現にとって、役割支持者にも役割圧迫者にもなりうることを主張した。その後、こうした関係を具体的な事例の中で検討するためにインテンシヴな面接調査を実施し、4人のケースを比較した結果、(1)一般的には夫が妻の役割アイデンティティに支持的であれば活動は促進され、逆に圧迫的であればその活動は縮小あるいは放棄される方向へと影響を受ける、(2)夫以外の重要な役割支持者を獲得している場合は、夫からの影響を受ける度合いが少なくなる、という2つの仮説を導き出した (野沢, 1988)。本稿では、個人のアイデンティティの重要性を表す変数を用いて、この仮説を再検討することをひとつの目的としている。

以下では、東京都立大学社会学研究室が、1986年8月に東京都練馬区光が丘パークタウンで実施した「集合住宅居住と社会参加に関する調査」のデータを使用し、この問題に検討を加えていきたい。

### 3. 分析の方法

#### 3.1 調査の概要と対象者の特性

この調査の対象地になった光が丘パークタウンは、住宅都市整備公団・東京都住宅局・東京都住宅供給公社の三者によって、練馬区の米軍住宅 (グラント・ハイツ) 跡地に建設された中高層の集合住宅である。今回対象としたのは、都営住宅と公団住宅 (分譲および賃貸) の居住者で世帯の主婦に該当する女性である。これらの住宅の入居開始時期は1983年3月から1985年3月にかけてであり、全体に居住歴が極めて短い住民によってのみ構成される地区である。対象となった住宅の総戸数は2376で、系統抽出によって580のサンプルが抽出され、東京都立大学の学生を中心とする調査員が訪問面接を行った。調査票の回収率は76.2% (442/580) であった。

調査対象者の特性をкаいつまんで述べよう。最終学歴は、高校50.6%, 短大・専門学校26.5%, 大学以上17.2%, 中学5.7%である。世帯構成では、夫婦とその子供のみの世帯が76.7%と大多数を占める。それ以外は夫婦のみの世帯12.4%, 三世代からなる世帯5.2%, 単身世帯1.6%などである。夫の職種では、経営管理職21.8%, 技能労務職20.8%, 一般事務職20.3%, 専門技術職13.6%, 自営業、販売職がそれぞれ10.7%などとなっている。

#### 3.2 アイデンティティの重要度とその測定

すでに述べたように個人のアイデンティティは自己が持つ複数の自己イメージであるとする、当然個々のアイデンティティは、本来個性的であり、ユニークなものである。同じく母親としてのアイデンティティを持っていたとしても、母親としてどう振る舞うべきかという具体的な内容は個人が描く理想像によってかなり大きな揺れ幅をもつに違いない。まして家族外のボランティアな活動は、多様な自己イメージとしてのアイデンティティに基づいているものと考えられる。しかし、女性の活動配分に影響を与えるいくつかの主要なアイデンティティを取り出し、その重要性の相対的な位置関係を描き出すためには、大胆な単純化が必要

である。そこで、ここではとりあえず以下に示す7つの活動領域を取り上げ、「現在の状態とは関係なく、あなたのお気持ちに近いもの」という聞き方で尋ね、最も自分の気持ちに近いもの（第1位）、その次に近いもの（第2位）、最も遠いもの（最下位）の3つを選んでもらった。

- 1 ひとりで趣味を楽しむ時間を大切にしたい  
[趣味人アイデンティティ]
- 2 グループ活動やサークル活動を通して、自分の能力を伸ばしていきたい [集団活動アイデンティティ]
- 3 仕事（職業）を通して、自分の能力を生かしていきたい [職業人アイデンティティ]
- 4 自分の関心や興味を夫とともにわかち合いたい [妻アイデンティティ]
- 5 理解しあえる友だちとの交際を大切にしたい [友だちアイデンティティ]
- 6 家族の健康や衣食住に十分な配慮をしたい [主婦アイデンティティ]
- 7 子どもにより教育を与えていきたい [母親（養育者）アイデンティティ]

7つの項目には仮にアイデンティティの名前をつけてある。この中から第1位、第2位、最下位を選んでもらうことによって、個人のその時点におけるアイデンティティの構造の大まかな様子を知ることができる。ある活動領域および役割関係に該当するアイデンティティが第1位に選ばれれば、想定される他のアイデンティティよりも、そのアイデンティティが重要性の度合いにおいて相対的に上位に位置付けられたということになる。

## 4. 主要な分析結果

### 4.1 家族周期段階とアイデンティティの変化

まず、対象となった女性たちのアイデンティティの全ての領域について、本人から見た重要度の序列は、家族周期段階の移行とともにどのような変化を見せるかを知る必要がある。そこでわれわれのサンプルについて、全般的な傾向を見ておこう。図1は各アイデンティティごとに、それを第1位あるいは第2位に挙げている人の比率

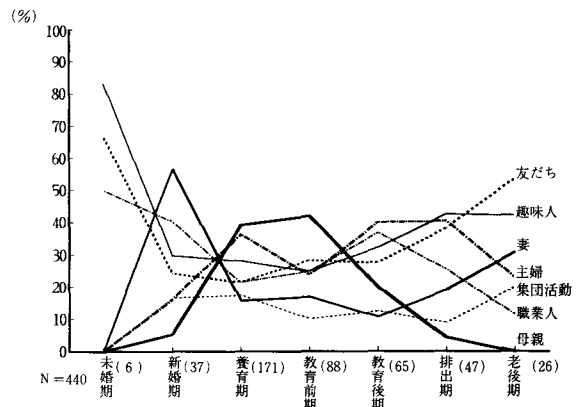


図1 家族周期段階と各アイデンティティの相対的重要性変化

を家族周期段階別にグラフに表したものである。<sup>8)</sup>つまりこのグラフは、家族周期段階の移行とともにどのアイデンティティが相対的に高く位置付けられるか、ということの全体的傾向を示していると言える。一見しただけで結婚や子供の誕生・成長といったライフコース上の出来事とともなって、各アイデンティティの顕在化と潜在化（相対的位置の変化）の様子がはっきりと読み取れる。

未婚期に当る人はサンプルが少ない（6人）ため傾向を読み取ることは慎重になる必要があるが、この時期にあっては趣味人のアイデンティティが圧倒的に高く、次いで友だち、職業人の順となっている。妻、主婦、母親といったアイデンティティは、実際に実現されていないので高く位置付けられることはない。図には示していないが、最下位に位置付けられたのは、母親と集団活動の2つのアイデンティティだけであった。

新婚期を見ると、結婚を境にしてアイデンティティの相対的位置関係が大きく変わる。未婚期に高かった趣味人や友だちとしてのアイデンティティが急激に低下し、職業人としてのアイデンティティが一部後退する。代わって夫婦関係におけるパートナーとしてのアイデンティティが顕在化し、全家族周期段階を通じて最も高く位置付けられる。同時に、主婦や集団活動のアイデンティティもある程度の上昇を見せる。

子供の誕生は再びアイデンティティ・ヒエラルキーの再編をもたらす。養育期には、妻と職業のアイデンティティの低下が顕著に見られ、一方、母親アイデンティティと主婦アイデンティティの急激な突出が目につく。またこの時期には、職業人アイデンティティを最下位に位置付ける人が全家族周期段階を通じて最も多くなる(35.5%)。教育前期においては、母親アイデンティティがやや高まってピークに達し、主婦アイデンティティが多少下降するほかは大きな変化はない。教育後期にはいると、最上位にあった母親(養育者)アイデンティティが下降の一途を辿り、代わって主婦、職業人、趣味人といった側面が再浮上してくる。ポスト子育て期の女性にとって、母親アイデンティティに代わるものが多様であることが伺える。養育期から教育後期にかけては、他の時期と異なり、母親アイデンティティを最下位に位置付ける人の割合は一貫して極めて少ない(それぞれ2.4%, 4.7%, 3.1%)。

排出期には、趣味人アイデンティティが主婦アイデンティティに代わって最上位につく。また、友だちや妻としてのアイデンティティが上昇する一方、職業人、母親の側面が低下する。年齢が50才以上で、子供が完全に独立して夫婦のみの世帯を構成する老後期においては、母親アイデンティティの位置が最低線に落ち、職業人、主婦アイデンティティも下位に落ちる。この時期に顕著に上昇するのは、友だち、妻、集団のメンバーとしてのアイデンティティである。子育ての時期に相対的に下位に押しやられていた友人との交際、夫婦のパートナーシップ、趣味活動や集団参加が排出期、老後期において再び重要性を帯びてくることがわかる。

以上、かなり詳しく家族周期段階ごとの変化を辿ってきたが、世代間の差異を差し引いても、年齢および家族状況の変化によってアイデンティティの相対的位置関係が再編成を繰り返すものであることが理解できた。結婚、出産、子供の成長により夫婦関係、親子関係が形成・変化すると、それにとまってそれぞれ妻、母親としてのアイデンティティが自己の中で重要性を帯びてくるわ

けである。殊に、ひとたび実際に母親になると、多くの女性にとって母親アイデンティティは他を圧倒する位置におかれていることが分かる。

しかし、自己の中で、妻となるべきパートナーとしてのアイデンティティや未来の母親像としてのアイデンティティがある一定の重要性を持ち、他のアイデンティティを凌駕した時にはじめて、個人は結婚することや親になることを決意することになる、という逆の作用も同時進行しているという一面がある。また特定のアイデンティティの具現としての活動をおこなうことが、自己のそのアイデンティティの評価を上げたり下げたりするという過程もある。すなわち自己の中で相対的に高い位置にあるアイデンティティが具体的な活動となって現れやすいと考えられるが、同時に活動を通してより高い評価(支持)を得られたアイデンティティは自己の中でより高く位置付けられるという相互作用的連関である。

そこで問題となるのは、自己の重要なアイデンティティの実現に当って、どのような他者との間に、活動のための支援者あるいは支持者としての関係を取り結んでいるかである。以下の分析では特に職業活動と集団参加活動を取り上げ、職業人、グループ活動参加者としてのアイデンティティの重要度の相対的高さが、実際の活動配分と結びつく際に、夫および近隣地域における友人との関係形成の状態とどのような関係を持っているのかを見ていく。その際ポイントとなるのは、(1)夫と近隣の友人は、各活動領域でのアイデンティティの実現にどの程度影響力を持ちうるか、(2)各活動領域での活動へのコミットメントの深さが、他の領域でのアイデンティティの実現にどのような影響を及ぼすか、(3)夫と近隣の友人は、職業と集団参加活動領域において妻がアイデンティティを活動に結び付ける際に及ぼす影響の点で、相互にどのような関連を持っているか、という3点である。

#### 4.2 職業活動と社会関係

まず指摘しておかなければならないことは、就業している女性の比率自体が、やはり家族周期段階の移行とともに大きく変化するということである。図2が示すように、未婚期から新婚期にかけ

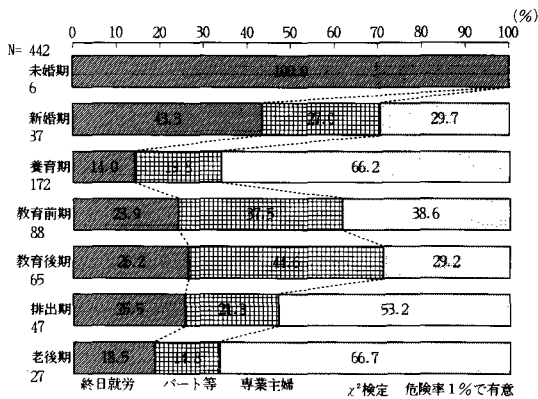


図2 家族周期段階と就業状態の変化

て高い就労率は、養育期に急激に減少し、専業主婦が3分の2に達する。その後、子供の成長にしたがって、パートタイムの就労を中心に比率が増加し、排出期、老後期に再び減少するという、いわゆるM字型就労の形を示している。これは、先に見たような、職業人アイデンティティの相対的高さの家族周期段階ごとの変化にはほぼ重なるものである。そこで、この職業人アイデンティティの高さを表す変数と実際の就業の形態との関連を見てみよう。先ほどの問いで、職業人アイデンティティを第1位あるいは第2位に上げた人を「職業人アイデンティティ\*高」に、それ以外の人を「職業人アイデンティティ\*低」として変数を構成している。(他のアイデンティティについても同様。)

表1を見ると、サンプル全体としては、職業人アイデンティティの高さと実際の職業活動が結び付く強い傾向があることが分かる。このアイデンティティが上位にある人のほうが、フルタイムあるいはパートタイムの職業に就いている比率が有意に高い。家族周期段階の変数をコントロールしてみると、養育期でアイデンティティの高いものも低いものも、ともに比較的に専業主婦が多くなっているのが目立つが、職業アイデンティティの高さと就業形態との関連は、どの段階においても有意な相関を示している。幼い子供の存在は、それ自体で職業アイデンティティの相対的位置を押し下げ、潜在化させるという意味では、子供の

存在が職業アイデンティティの実現を阻む要因になっていると言える。しかし、家族周期段階の変化にもかかわらず相関が見られるということは、職業活動がなされるかどうかにとって、女性個人の職業アイデンティティの高さが非常に大きな要因であることを物語っている。

では、職業活動と夫婦関係はどのような関連を持っているであろうか。夫婦関係に関する変数として、①夫が妻の話しをよく聞くか[コミュニケーション評価]、②夫は家事を手伝うか[主婦役割への支援評価]、③夫と一緒に参加集団があるか[社会活動・社会関係の重なり]、④夫婦の信頼関係に気がかりがあるか[夫婦関係の安定性]の4変数を取り上げ、これらと妻の就業形態との関連、およびこれらの夫婦関係変数をコントロールした際の職業アイデンティティの高さと就業形態との相関を見てみた。結果的には、就業の形態が夫の主婦役割支援に対する評価と高い相関があることが分かったが、そのほかの夫婦関係変数とは有意な相関がなく、またこれらの変数をコントロールしてもアイデンティティの高さと活動の相関に大きな変化はなかった。

つまり、職業アイデンティティの実現に関して影響を与えうる夫との関係側面は、単なる関係の安定性やコミュニケーションの評価、活動・関係の共有といった夫婦関係の伴侶性レベルのものではなく、家庭内部での主婦としての役割行動を軽減してくれるような夫の援助行動の程度にあると言えるようである。これは、幼い子供の存在が唯一職業アイデンティティの実現を阻む大きな要因になっていると考えられることからしても、(そして子供の年齢が低い家族周期段階において、一日当りの家事時間が極端に長くなっていることからしても)当然と言えるかもしれない。但し、就業と夫の家事への参加の程度との間には、職業を持つことによって夫の家事への関わりが大きくなるという方向での規定関係も考えられるため、一義的にどちらが独立変数で、どちらが従属変数であるとは言えない。

この点に注意しながらも、夫の家事への協力が得られるような夫婦関係であることが、妻の職業

表1 家族周期段階×職業人IDの高さ×回答者の就業状態

家族周期段階	職業人IDの高さ	回答者の就業状態				
		N =	終日就労	パート等	専業主婦	
合 計		427	22.7%	27.2%	50.1%	$\chi^2 1\%$ 有意 C r = 0.366
	*高**	111	41.4% ++	37.8% ++	20.7% --	
	*低**	316	16.1% --	23.4% --	60.4% ++	
新 婚 期		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2 5\%$ 有意 C r = 0.491
		36	44.4%	25.0%	30.6%	
	*高**	15	66.7% +	26.7%	6.7% --	
養 育 期		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2 1\%$ 有意 C r = 0.261
		166	13.3%	19.9%	66.9%	
	*高**	35	25.7% ++	31.4% +	42.9% --	
教育前期		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2 1\%$ 有意 C r = 0.363
		86	23.3%	38.4%	38.4%	
	*高**	21	33.3%	57.1% +	9.5% --	
教育後期		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2 5\%$ 有意 C r = 0.342
		64	26.6%	43.8%	29.7%	
	*高**	23	43.5% +	43.5%	13.0% -	
排 出 期		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2 5\%$ 有意 C r = 0.432
		44	25.0%	20.5%	54.5%	
	*高**	11	45.5% +	36.4%	18.2% --	
老 後 期		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2 5\%$ 有意 C r = 0.534
		25	20.0%	16.0%	64.0%	
	*高**	3	66.7% +	33.3%	0.0% --	
	*低**	22	13.6% -	13.6%	72.7% ++	

無回答・非該当 6

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1%水準有意, +, -: 5%水準有意。

への深いコミットメントの条件であることをふまえてこれを独立変数として、いくつかの夫婦関係変数をコントロールしてみると、夫婦関係の他の側面も間接的には妻の就業に影響を持っていることが分かる。表2に示すように、夫婦関係の安定

性をコントロールしてみると、夫婦の信頼関係に気がかりを感じないグループでは夫の家事への参与と職業へのコミットメントの間の有意な相関はなくなり、夫婦の信頼関係に不安を持つグループではこの相関が一層高まっている。つまり夫婦間

表2 夫婦の信頼関係×夫は家事手伝うか×回答者の就業状態

夫婦の信頼関係 夫は家事手伝うか		回答者の就業状態				$\chi^2$ 1%有意	C r=0.156
		N =	終日就労	パート等	専業主婦		
合 計		421	20.7%	27.6%	51.8%		
	よくする	97	36.1% ++	21.6%	42.3% -		
	ときどき	168	15.5% -	33.9% ++	50.6%		
	し ない	156	16.7%	24.4%	59.0% +		
気がかり		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2$ 1%有意	C r=0.251
		169	21.3%	27.8%	50.9%		
	よくする	37	48.6% ++	24.3%	27.0% --		
	ときどき	61	14.8%	32.8%	52.5%		
	し ない	71	12.7% --	25.4%	62.0% ++		
不安なし		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2$ -	C r=0.112
		248	19.8%	27.8%	52.4%		
	よくする	59	27.1%	20.3%	52.5%		
	ときどき	106	16.0%	34.9% +	49.1%		
	し ない	83	19.3%	24.1%	56.6%		

無回答・非該当 4

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1%水準有意, +, -: 5%水準有意。

注) 「夫婦の信頼関係」については, 回答のカテゴリーのうち「とても気がかりだ」と「やや気がかりだ」をまとめて「気がかり」とした。

係に不安定感を抱く者においては, 夫の家事協力を取りつけられるかどうか, 自己の職業アイデンティティを実際の職業活動に結び付けるための条件になる。なぜならば, そうせずに就業することは夫婦の関係をますます不安定にさせる要素になってしまうからである。夫婦関係が安定しているとみなす妻においては, 夫の家事協力はその意味での重要な規定要因にはならない。

この点との関連で興味深いのは, 職業人アイデンティティの高さを第3変数として導入した場合である(表3)。職業アイデンティティが相対的に高い場合には, 夫の家事への参加の程度に関係なくフルタイムあるいはパートタイムの職業に就くものが多いのに対して, アイデンティティの位置付けが相対的に低い場合には, 夫の家事協力の程度がはっきりとした相関を示す。この差はおそらくモチベーションの違いにあると考えられる。職業アイデンティティが高い位置にあるというこ

とは, 就業の動機の多くの部分が自己のアイデンティティの実現という意味を持っているということである。それに対して, 職業アイデンティティの位置づけが低いにもかかわらず就業するという場合は, むしろ世帯の収入を得るという経済的動機が主であると考えられ, それはいわば家庭内役割の延長である。従って, 家族員全体のためという意味を持つ就業においては, そのために緊張を強いられる主婦役割の援助に夫も参加せざるを得ない状況が生まれやすいのであろう<sup>9)</sup>。

さて, 女性の職業活動について, 夫との関係のあり方が与える影響について見てきたが, 近隣での交際関係はどのような関連を持っているだろうか。ここでは, ①居住棟内でつきあい(立ち話, 茶飲み話, 互いの家を訪問するなど)のある人の数[近隣交際ネットワークの広がり], ②プライベートなことででも話せる近所の人がいるか[近隣内の親しい友人関係の存在], の2つの変数を取



表3 職業人IDの高さ×夫は家事手伝うか×回答者の就業状態

職業人IDの高さ 夫は家事手伝うか		回答者の就業状態				$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.156
		N =	終日就労	パート等	専業主婦		
合 計		421	20.7%	27.6%	51.8%		
	よくする	97	36.1% ++	21.6%	42.3% -		
	ときどき	168	15.5% -	33.9% ++	50.6%		
	し ない	156	16.7%	24.4%	59.0% +		
		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2$ -	C r = 0.154
*高**		99	39.4%	38.4%	22.2%		
	よくする	27	51.9%	33.3%	14.8%		
	ときどき	37	27.0% -	45.9%	27.0%		
	し ない	35	42.9%	34.3%	22.9%		
		N =	終日就労	パート等	専業主婦	$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.163
*低**		307	14.3%	24.1%	61.6%		
	よくする	66	28.8% ++	16.7%	54.5%		
	ときどき	124	12.1%	29.8% +	58.1%		
	し ない	117	8.5% -	22.2%	69.2% +		

無回答・非該当 15

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1%水準有意, +, -: 5%水準有意。

り上げ、これらと就業状態の関連を見、またこの3変数をコントロール変数としてアイデンティティの高さと就業形態との関連にどのような変化があるかを見てみた。

就業の状態と相関を示す近隣関係変数は、近隣内の親しい友人の存在である。フルタイムの職業を持っている女性は近隣内友人のいるものが有意に少なく、専業主婦で有意に多い( $\chi^2$ 検定、危険率1%)。しかしこの場合は、就業形態が独立変数と考えるべきであろう。就業時間が多い場合、近隣との交際の機会は減少する。逆に専業主婦には幼い子供を持つ母親が多いことから、職業アイデンティティが相対的に低く、あるいは幼児の存在によって職業を持たないことを決めた妻たちが、多くの場合子供を媒介として近隣での交際関係を深めるものと考えられる。近隣関係変数をコントロールして相関が見られなくなるのは、近隣交際ネットワークが7人以上と最も大きいカテゴリーにおいてだけである。しかしこの場合注意しなければならないことは、交際人数が最も多いグループでは世帯の収入階層が最も低い層の比

率が有意に高いことである。同時に、このグループは養育期にある者の比率が有意に高く、7人以上の交際関係を持つ女性の実に半数以上が未就学の子供を持っていることから、アイデンティティの高さと就業状態がはっきりとした相関を示さないものと推測される。近隣での交際数が直接に職業アイデンティティの実現を規定するとは考えにくい、こうした要因と相まって、近隣社会への広範なコミットメントが職業アイデンティティの実現を阻む要因のひとつとなっている可能性はある。

#### 4.3 集団参加と社会関係

地域社会を中心とした集団には、様々なものがみられる。参加の多いものだけを挙げれば、生協(32.4%)、文化・教養・趣味のサークル(17.4%)、PTA(12.9%)、スポーツ・体操をするサークル(12.4%)、宗教団体(8.1%)などである。ここでは、様々な種類の集団を分類することは避けて、個人のアイデンティティの実現という意味の参加のみをすくい出す意味で、熱心に活動しているグループがあるかどうかのみを問題

とした。

熱心な集団活動をしている人の比率は、家族周期段階の移行によってほとんど変化せず、有意差は見られない。一方、集団活動アイデンティティの高さは、熱心な参加活動との間に強い相関が見られる。しかし、この集団活動アイデンティティ

と実際の熱心な集団参加との間の相関を、家族周期段階をコントロールしたうえで見ると、就業活動の場合とは異なり、養育期、教育前期、老後期においてのみ有意な相関が残り、他の周期段階では相関が消えてしまう（表4）。母親や主婦としてのアイデンティティ、職業アイデンティティが

表4 家族周期段階×集団活動IDの高さ×熱心参加グループ

家族周期段階	集団活動IDの高さ	熱心参加グループ			$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.254
		N =	参加あり	参加なし		
合 計		429	21.4%	78.6%		
	*高**	61	49.2% ++	50.8% --		
	*低**	368	16.8% --	83.2% ++		
新婚期		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ -	C r = 0.055
		36	27.8%	72.2%		
	*高**	6	33.3%	66.7%		
養育期		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.302
		166	17.5%	82.5%		
	*高**	29	44.8% ++	55.2% --		
教育前期		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.358
		87	27.6%	72.4%		
	*高**	9	77.8% ++	22.2% --		
教育後期		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ -	C r = 0.237
		64	21.9%	78.1%		
	*高**	8	50.0% +	50.0% -		
排出期		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ -	C r = 0.057
		45	17.8%	82.2%		
	*高**	4	25.0%	75.0%		
老後期		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 5%有意	C r = 0.396
		25	24.0%	76.0%		
	*高**	5	60.0% +	40.0% -		
	*低**	20	15.0% -	85.0% +		

無回答・非該当 6

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1%水準有意, +, -: 5%水準有意。

相対的に重要性を喪失し、比較的自由な時間にも恵まれる老後期において、集団活動アイデンティティが実現されやすいことは理解できる。しかし、子供が幼い段階での、この相関の高さはどのように説明できるのだろうか。

まず夫婦関係変数であるが、これらはすべて家族周期段階とは有意な相関を示さない。一方、近隣関係変数は、2つとも家族周期段階と有意な相関を持ち、養育期において親しい友だちを持つ者の比率と棟内交際人数7人以上の比率がピークを示す。そこで近隣交際の広がりをもコントロールしてみると、交際人数が0～2人というグループではアイデンティティの高さと参加活動の相関は弱まってしまふ(表5)。つまり、集団活動アイデンティティの相対的高さが活動に結び付くためには一定の数の交際関係の広がりが必要であり、その中から共通の興味・関心を分かち合える仲間を見いだすことが条件となると考えられる。養育期にある女性は、子供を媒介として比較的容易にこ

のような関係を広げることができるものと思われるのである。子育て期にあって、家庭外で自己のアイデンティティを実現したいという女性にとって近隣での交友関係は重要な資源となりうる。

夫婦関係変数をコントロール変数とすると、夫の家事への参与の程度を導入した場合においてのみ相関に差が現れ、夫の主婦役割への援助があるグループにのみ相関が残る(表6)。また、就業状態をコントロールした場合は、専業主婦であるグループでのみ相関が見られる(表7)。妻の集団活動アイデンティティは、家庭内の主婦役割にまつわる仕事を軽減するような夫の関与、そして就業の状態による、自由時間の作り易さという2つの要因にかなり強く規定されていると言えるだろう。

ところで、熱心な集団参加が見られるかどうかは、夫と一緒に参加している集団があるかどうかによっても有意な差を見せる。夫婦一緒に参加は夫と妻の活動と社会関係の少なくとも一部の重なり

表5 棟内近隣交際人数×集団活動 ID の高さ×熱心参加グループ

棟内近隣交際人数	集団活動 ID の高さ	N =	熱心参加グループ		$\chi^2$ 1% 有意	C r = 0.254
			参加あり	参加なし		
合 計		429	21.4%	78.6%		
	*高**	61	49.2% ++	50.8% --		
	*低**	368	16.8% --	83.2% ++		
0～2人		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ --	C r = 0.136
		146	9.6%	90.4%		
	*高**	12	25.0% +	75.0% -		
3～6人		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 1% 有意	C r = 0.294
		174	24.1%	75.9%		
	*高**	27	55.6% ++	44.4% --		
7人以上		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 5% 有意	C r = 0.224
		109	33.0%	67.0%		
	*高**	22	54.5% ++	45.5% --		
	*低**	87	27.6% --	72.4% ++		

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。  
++, --: 1%水準有意, +, -: 5%水準有意。

表6 夫は家事手伝うか×集団活動IDの高さ×熱心参加グループ

夫は家事手伝うか 集団活動IDの高さ		N =	熱心参加グループ		$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.254
			参加あり	参加なし		
合 計		429	21.4%	78.6%		
	*高**	61	49.2% ++	50.8% --		
	*低**	368	16.8% --	83.2% ++		
よくする		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.344
		93	22.6%	77.4%		
	*高**	13	61.5% ++	38.5% --		
ときどき		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.316
		163	20.9%	79.1%		
	*高**	30	50.0% ++	50.0% --		
しない		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ -	C r = 0.144
		152	23.0%	77.0%		
	*高**	17	41.2% +	58.8% -		
	*低**	135	20.7% -	79.3% +		

無回答・非該当 21

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1%水準有意, +, -: 5%水準有意。

表7 回答者の就業状態×集団活動IDの高さ×熱心参加グループ

回答者の就業状態 集団活動IDの高さ		N =	熱心参加グループ		$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.254
			参加あり	参加なし		
合 計		429	21.4%	78.6%		
	*高**	61	49.2% ++	50.8% --		
	*低**	368	16.8% --	83.2% ++		
終日就労		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ -	C r = 0.195
		97	14.4%	85.6%		
	*高**	7	42.9% +	57.1% -		
パート等		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ -	C r = 0.146
		116	20.7%	79.3%		
	*高**	13	38.5% +	61.5% -		
専業主婦		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.303
		216	25.0%	75.0%		
	*高**	41	53.7% ++	46.3% --		
	*低**	175	18.3% --	81.7% ++		

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1%水準有意, +, -: 5%水準有意。

表8 棟内近隣交際人数×主人と一緒にの参加×熱心参加グループ

棟内近隣交際人数	主人と一緒にの参加	熱心参加グループ		$\chi^2$ 1%有意	C r = 0.214
		N =	参加あり	参加なし	
合 計		442	21.3%	78.7%	
	参加あり	70	42.9% ++	57.1% --	
	参加なし	372	17.2% --	82.8% ++	
0～2人		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ -- C r = 0.102
		151	9.3%	90.7%	
	参加あり	16	18.8%	81.3%	
3～6人		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 5%有意 C r = 0.185
		180	24.4%	75.6%	
	参加あり	27	44.4% ++	55.6% --	
7人以上		N =	参加あり	参加なし	$\chi^2$ 1%有意 C r = 0.274
		111	32.4%	67.6%	
	参加あり	27	55.6% ++	44.4% --	
	参加なし	84	25.0% --	75.0% ++	

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1%水準有意, +, -: 5%水準有意。

りを示している。表8に見られる通り、この変数をコントロールしてもアイデンティティの高さと熱心な参加の有意差に変化が現れないことから、近隣の交際ネットワークの広がりの中から形成される活動仲間とは異なり、夫が一義的に妻のアイデンティティの実現という意味での参加を促進する関係資源となるわけではないことは明らかである。しかしながら、夫と活動とともにし、かつ近隣内に広範な交際ネットワークを形成しているということは、いわば夫を巻き込んだ形で近隣交際ネットワークを形成しているということであり、そこへのコミットメントは極めて抜き差しならぬものとなる。夫と一緒にの参加活動も近隣での交際関係が希薄な状況でなされるものであるならば、コミットメントの深みには至らないのである。

## 5. 結語にかえて

### ——外と内の社会関係——

最後に、これまでの説明とはまったく逆の方向からの問いを發してみよう。つまり、家族外での活動へのコミットメントは、結局家族内の関係のあり方にどのような結果をもたらすことになるのかという問いかけである。その答えを導くための手がかりとして、表9と表10を比較してみよう。それぞれ現在の就業状態と熱心な集団参加の有無をコントロール変数として、夫とのコミュニケーションへの評価が、妻アイデンティティの高さとどのような関連を持つかを示したものである。2つの表は非常に対照的な結果を示唆している。職業活動へのコミットメントは、夫とのコミュニケーション次第で妻としてのアイデンティティの重要性が影響されやすい状況をもたらし、逆に地域での集団への参加は夫の態度によって妻アイデンティティの位置付けを左右されない状況を生み

表9 回答者の就業状態×夫は妻の話聞くか×妻 ID の高さ

回答者の就業状態	夫は妻の話聞くか	妻 ID の高さ		$\chi^2$ 1 % 有意	C r = 0.165
		N =	*高**	*低**	
合 計		419	20.8%	79.2%	
	よく聞く	193	28.0% ++	72.0% --	
	聞かない	226	14.6% --	85.4% ++	
終日就労		N =	*高**	*低**	$\chi^2$ 5 % 有意 C r = 0.269
		86	22.1%	77.9%	
	よく聞く	42	33.3% ++	66.7% --	
	聞かない	44	11.4% --	88.6% ++	
パート等		N =	*高**	*低**	$\chi^2$ 5 % 有意 C r = 0.220
		116	18.1%	81.9%	
	よく聞く	56	26.8% ++	73.2% --	
	聞かない	60	10.0% --	90.0% ++	
専業主婦		N =	*高**	*低**	$\chi^2$ -- C r = 0.099
		217	21.7%	78.3%	
	よく聞く	95	26.3%	73.7%	
	聞かない	122	18.0%	82.0%	

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1 %水準有意, +, -: 5 %水準有意。

表10 熱心参加グループ×夫は妻の話聞くか×妻 ID の高さ

熱心参加グループ	夫は妻の話聞くか	妻 ID の高さ		$\chi^2$ 1 % 有意	C r = 0.165
		N =	*高**	*低**	
合 計		419	20.8%	79.2%	
	よく聞く	193	28.0% ++	72.0% --	
	聞かない	226	14.6% --	85.4% ++	
参加あり		N =	*高**	*低**	$\chi^2$ -- C r = 0.071
		92	21.7%	78.3%	
	よく聞く	49	24.5%	75.5%	
	聞かない	43	18.6%	81.4%	
参加なし		N =	*高**	*低**	$\chi^2$ 1 % 有意 C r = 0.190
		327	20.5%	79.5%	
	よく聞く	144	29.2% ++	70.8% --	
	聞かない	183	13.7% --	86.3% ++	

注) パーセントの横の+, -記号は比率の差の検定結果。

++, --: 1 %水準有意, +, -: 5 %水準有意。

出している。

この差は、おそらく役割（アイデンティティ）支持者の配置のされ方の違いから説明できるのではないだろうか。職業人アイデンティティの高い妻たちあるいはそれに重なるに違いないフルタイムの仕事を持つ妻たちの多くは、夫との支援とは比較的無関係に（もちろん関係を不安定にさせないように気を配りながら）、ひたすら自己の職業人アイデンティティの強さを頼みに仕事に打ち込んでいる。そして職場と家庭内での自己のアイデンティティは明確に分離されている。と同時に、それぞれのアイデンティティが支持を取りつける相手が全く分離している。従って、家庭にあるときは家族は孤立した核家族になりがちである。開発されて間もない集合住宅団地であればなおさらであろう。それゆえ、結果的に妻としてのアイデンティティが夫との関係の中だけで揺らぎやすくなる。

一方、地域での集団参加活動をめぐるアイデンティティが高く、活動自体にも熱心な女性は、ある程度夫を家事の領域にも引き入れながら、近隣の母親同士の絆を支えとして活動を展開している。集団活動アイデンティティの支持者である近隣内の友人たちは、家族内の主婦アイデンティティや母親アイデンティティにとっての支持者としても重要な位置を占めている。これらの家族内外のアイデンティティは融合しているようにさえ見える。こうした近隣関係の中に夫も巻き込んで、場合によっては身動きのしにくいコミットメントを作り上げてしまっていることもある（もちろんそれゆえに、夫と近隣の友人を注意深く分離しておくという戦略を取る妻も多いだろう）。いずれにせよ、日常的に接触できる近隣という場において夫以外に重要なレファレンス・パーソンを獲得しているために、夫の態度次第で妻アイデンティティが揺らぐようなことは少ない。（因みに、近隣での親しい友人の有無を第3変数としてコントロールしても、表10と同様の傾向が現れる。）

これら2つの女性のイメージは、本稿の分析結果の全体的傾向を、大胆に推し進めて描き出した類型に過ぎない。実際には多くの女性は、この二

つの類型の中間的状態の中で、家の中と外のアイデンティティのバランスを保とうとしていることになろう。本稿では個人のアイデンティティの位置関係を一応の独立変数としながらも、その実現としての活動状況、および個人の社会関係の布置状況に相互規定関係を想定している。社会的文脈は異なるが、ある意味では、ボット（E. Bott, 1957）が提示した、家族外のネットワークの形態が夫婦役割の分離度を規定するという仮説を、相互規定的に、かつ個人のアイデンティティの実現という主題をめぐって再構成しようとしたのが本稿の目的であったと言い替えることができよう。

しかし、ここでの分析は考慮すべきいくつかの点を不問に付したままである。ひとつには、個人の社会関係の中でも、親族、地域外の友人といった主要な関係を無視しており、パーソナル・ネットワークの全体像を描き切っていないことである。第二には、居住地域、社会階層およびその重なりによって醸成される独特の生活様式が、家族内外の社会関係の形成のされ方にどのように関連しているかを論じられなかったことである。これは、ボットが二つの型のネットワーク形成の背景として前提し、ヤングとウィルモット（Young and Willmott, 1962）が明示的に取り扱ったテーマである。特に後者の点については我々のデータからも一定の示唆を得られたが、体系的な議論はとりあえず今後の課題としたい。

#### 註

- 1) Vogel (1963: [訳] 116f)
- 2) Vogel (1963: [訳] 163)
- 3) NHK 世論調査部編 (1985: 40) を参照。
- 4) 矢沢澄子 (1988), 越智昇 (1988), 横浜市民局 婦人行政推進室 (1985) などを参照。
- 5) 職業と結婚、出産との関係を9つのタイプに分けて、実際になりそうな人生として尋ねた調査で、20代の女性で最も高い比率を示したタイプは「結婚し出産する、仕事持ち続ける」(27.0%)であり、以下「結婚し出産する、出産で一時仕事を離れ子供が一定の年齢に達したら再び仕事につく」(21.4%), 「結婚し出産する、結婚で仕事を離れ子供が一定の年齢

- に達したら再び仕事につく」(17.5%)などとなっている。経済企画庁国民生活局編(1987:140)
- 6) McCall & Simmons (1978), Chapter 4 参照。
- 7) 以下の議論ではストライカー (Stryker 1968:561-563) のアイデンティティとコミットメント(関係ネットワークの広がりや深さ)に関する一連の仮説を参考にしている。
- 8) 家族周期段階は以下のように設定した。未婚期[未婚で年齢が50歳未満], 新婚期[子供のない夫婦世帯を構成し年齢が50歳未満], 養育期[就学前の子供(末子)がいる], 教育前期[小学生の子供(末子)がいる], 教育後期[中学生・高校生の子供(末子)がいる], 排出期[末子が18歳以上], 老後期[夫婦のみの世帯で年齢が50歳以上]。
- 9) フューチス(R. Fuchs, 1971)は, このようなタイプの就業を「家族志向」的の就業と呼んでいる。

### 文 献 - 覧

NHK 世論調査部(編)

1985 『現代日本人の意識構造 第二版』

NHK ブックス

越智昇

1988 「都市新中間層とボランティア・アソシエーション」『都市問題』79巻4号

経済企画庁国民生活局(編)

1987 『新しい女性の生き方を求めて——長寿社会における女性のライフコース——』

野沢慎司

1986 「主婦の社会参加活動と夫婦関係」倉沢進(編)『高層集合住宅団地における管理システムと生活構造の研究』科学研究費補助金研究成果報告書

1988 「主婦の社会参加を巡る夫婦関係・友人関係——都市集合住宅団地における4人の事例——」『社会学論考』9号

矢沢澄子

1988 「都市女性と住民運動」『都市問題』79巻4号  
横浜市市民局婦人行政部推進室

1985 『横浜市女性の生活ネットワーク調査』

Bott, Elizabeth

1957 Family and Social Network, London: Tavistock Publications

Fuchs, Riet

1971 "Different Meanings of Employment for Women," Human Relations, 24

Henry, J.

1958 "The Personal Community and its Invariant Properties," American Anthropologist 60

McCall, George and J. Simmons

1978 Identities and Interactions: revised edition, New York: The Free Press

Stryker, Sheldon

1968 "Identity Salience and Role Performance: The Relevance of Symbolic Interaction Theory for Family Research," Journal of Marriage and the Family, 30

Vogel, E. F.

1963 Japan's New Middle Class, University of California Press

佐々木徹郎(訳編)『日本の新中間階級——サラリーマンとその家族——』(誠信書房, 1968)

Young, Michael and Peter Willmott

1962 Family and Kinship in East London, Penguin Books

### Key Words (キー・ワード)

Identity (アイデンティティ), Social Relationship (社会関係), Family Relationship (家族関係), Neighborhood (近隣), Friendship (友人関係), Role-Support (役割支持), Personal Network (パーソナル・ネットワーク)